

博報財団 第11回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名	LANGTON Nina Jean(ラングトン ナイナ ジーン)
在住国名	カナダ
所属・役職	ブリティッシュ・コロンビア大学オカナガン校 文学批評学部 日本語学科 准教授
招聘回(招聘研究期間)	第11回 (2106年 9月 1日～ 2017年 2月 28日)
受入機関	立命館大学
招聘研究テーマ	オンライン「初歩日本語クラス」で使用するデジタル教材の開発に向けたベストプラクティスについての調査
研究目的	<p>大学の初年度の語学クラスは、学生を次年度の授業履修につなげる重要な時期です。日本語と日本文化を紹介し、豊かで学生を引き入れるコースを提供する必要があります。そのような授業、特に、学生が途中でやめる確率の高いオンライン授業で利用する教材はさらに重要となります。教材作成は、意味性・形式性をバランス重視した実践的な言語能力・多文化能力を養わせ、受容、産出、やりとりのスキルを上達させることを可能にします。</p> <p>以上のことから以下の研究目標を設定しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習者(いつでも、どこでもつながりたい学生、内気な学生、遠方に住み大学に定期的に通うことが難しい学生)側のニーズに応じるようなオンライン授業・デジタル教材を提供すること ・大学側のニーズ(以上のような学生により多くの学習の機会を与えたい)に応じること ・理論に基づいている効果的な教材を作成すること
研究成果概要:	<p>以上の研究目的から以下の研究課題を設定しました。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 第二言語習得の理論や視点から、どのようなことが導き出せるか。 2. 実践者から教材および教具・ソフトウェアについて、どのような示唆を得ることができるか。 3. 学生にとって最も効果的、動機付けとなるオンライン教材の特徴とは？ <p>教材作成では、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コースデザインやシラバスの作成により、効果的なタスクの進め方を考察・計画 ・イメージやビデオなどの生教材の収集。 ・生教材使用のための新しいソフトウェアの操作。 ・日本語学習者に教材のフィードバックをもらった。 ・教材のさらなる修正。 <p>以上の調査から考察を導き出しました。教材作成においては以下の点を重視し、さらなる教材作成の改善につなげていくこととします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インタラクティブ・オースエンティックな活動の重要性 ・学生の主体性の促しにつながる柔軟性(学習者一人一人に合わせた学習法の重視) ・技術面(表現に気をつけること、キーボード入力の指導)

展望:

- ・所属大学で日本で作成した教材を授業で使用する。
- ・対面コースとオンラインコースの学習成果を比較し、オンラインコースの効果を明らかにする。
- ・所属大学や学会で専門的知見を共有する。また、言語学や教育学系の研究誌で成果を発表。
- ・学生同士のインタラクションを活性化させるためのタスクと課題の作成・修正・改良。
- ・オンライン環境での不正防止につながる試験管理についての研究。

以上のように、本調査の成果は、教師、学習者、大学にとっても意義のある結果につながり、日本語教育の発展に貢献できると考えています。